

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号： 14101
 研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2010 ～ 2012
 課題番号： 22520239
 研究課題名 (和文) エマソンの詩とその現代性についての研究
 研究課題名 (英文) Emerson's Poetry and Its Modernity

研究代表者

小田 敦子 (ODA ATSUKO)
 三重大学・人文学部・教授
 研究者番号： 80194554

研究成果の概要 (和文) : エマソンの詩をエマソンの作品全体の中に位置づけ、詩がもつ現代的な意味を明らかにした。エマソンの詩は当時の科学が発見した自然観に基づく世俗的、現代的な精神を表現しており、より慣習的な思想に縛られるエッセイを読む上で、エマソンの新しい世界観を示唆する用語集、重要概念の指標になることを実証した。エマソンの思考の全体性を表わすような形で詩を分類し、エマソンを広く一般に知らせるための訳詩集の出版の準備を整えた。

研究成果の概要 (英文) : By reading Emerson's poetry closely in relation to his prose, we investigated the location and meaning of poetry in Emerson's work. His poetry turns out to be more clearly based on the scientific perspective current to his world than his essays which retain more of the conventional ideas held by the audience. The poetry thus functions as an index and a glossary to the important ideas implied or hidden in his essays. We have almost finished the preparation for publication of the Japanese translation of Emerson's poetry, which will help make Emerson more accessible to general readers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：米文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：米文学、エマソン、アメリカ詩、ロマン主義、象徴主義、自然、ペルソナ

1. 研究開始当初の背景

エマソンはアメリカで最初の“Public Intellectual”としてアメリカ文学や思想の成熟と発展に大きな影響を与えたが、現代の読者とその真価を知るのには容易ではない。テキストの読みにくさのために過小評価されているエマソンをアメリカ文学研究の中に正しく位置づけ、より多くの読者が興味を持つ

て読めるものにするために、特に「詩人」として過小評価されているエマソンを再評価することが、有効ではないかと考えた。

エマソン自身、エッセイの冒頭に自作の詩を付したように、自らを「詩人」と定義しており、彼にとって詩は重要なものである。エマソンが一生書き続けた詩は、エッセイよりも私的なもので、エマソンの創作、思考に深

く関わっているが、M. Arnold はじめ批評家たちの低い評価や決定稿に欠けるなどの理由から、これまであまり研究されてこなかった。Dickinson や Whitman の詩との類似性、20 世紀の Frost や Stevens のエマスンへの傾倒を考えると、エマスンの詩には十分に独自性、アメリカ的性質、ひいては現代性があるのではないかと予想されるが、20 世紀の詩人へのエマスンの影響を論じた Richard Poirier の *Poetry and Pragmatism* も、殆どがエッセイを論拠としており、アメリカ現代詩の「先触れの走者」としてエマスンの詩を読む視点は欠落していた。

2. 研究の目的

エマスンが詩という形式で表現しようとしたものを明らかにする。そして、エマスンの詩をエマスンの著作全体の中に位置づける。つまり、エマスンの詩は、*Nature* に典型的なように、趣旨のわかりにくいエッセイを読む上で、キーワードの用語集のような訳割を果たすものでもあるのではないかという仮説を実証するべく、詩の解釈とともに、詩とエッセイとの関連を明らかにしていく。

また、一般読者にエマスンを普及するために、これまで日本ではエッセイしか出版されていないので(大正期に簡略化された訳詩集があるが)、エマスンの訳詩集を出版することをめざす。エマスンの詩は、公の場で読まれた儀式的なものから風俗劇的なもの、自然との対話など意外に幅広い題材を扱っているため、エマスンの関心や思考の思考全体像がわかるような詩集の章構成や詩の選択をすれば、エマスンの表現の特徴に触れるとともに、自伝的要素も知ることができ、有用な入門書になりうる。そのために必要な歴史的事実、同時代の社会への関心についても議論を深める。

3. 研究の方法

エマスンが出版した 2 冊の詩集、*Poems* (1847)、*May-Day and Other Pieces* (1867) を中心に、翻訳と注釈を完璧なものに近づけるために、毎月連携研究者の武田雅子研究室で研究会をもち、協同研究者の藤田佳子にも参加してもらい、議論を深めていった。海外協同研究者とは、普段は E メールによって論点を伝え、意見を交換したが、夏や冬の休暇中には、研究代表者または連携研究者がアメリカを訪問し、研究会をもち、議論の余地のある論点について、より正確で興味深い解釈に達することができた。Wider は、批評史に詳しいだけでなく、エマスンのテキストの表現やスタイルへの鋭い感覚と知識をもっているため、詩を解釈する上でも大変参考になった。2011 年には、ハーバード大学出版局のエマスン選集の *Poems* が出版されたので、

それを参考に、翻訳や注釈を見直す作業を進めた。

研究会では、主に、小田は詩とエッセイとの関係を中心に、武田は英米詩の伝統のなかでエマスンの詩の特質を中心に、問題を提起し、藤田と Wider はエマスン研究、批評史の文脈からそれに応える形をとった。最終年度には、Wider を日本に招いて、成果発表をすることを念頭において、各共同研究者の研究課題から共通する部分、広くアメリカ文学研究者がエマスンについて知るべきこととして、エマスンの第一作であり代表作『自然』の解釈に関わることに焦点を絞った調査研究していくようにした。

4. 研究成果

エマスンのエッセイを理解するために詩が有効であることを明らかにできたことがいちばんの成果であった。そして、エマスン研究のためだけではなく、広く一般に、エマスンの思想、表現、生涯を知らせるという目的のためにも役立つ形で、訳詩集を編集し、出版に向けた準備をほぼ整えることができた。

エマスンの詩は Matthew Arnold が指摘した構文の不明瞭さに加えて、異教的な擬人法や比喩が多いため、これも Arnold が言うように「単純でも感覚的でも、感動的でもない」ようにみえる。しかし、英米詩の詩形の研究を進めている武田雅子や、エマスンのペルソナに焦点を絞ってエマスンの作中の声を研究する藤田佳子との議論により、エマスンの詩の多くの主題が自然であること、それも光や風など「気配」のように感じられる自然を描いている、その点では超絶的である以上に、感覚的な詩であることがわかった。

そして、エマスンが自然と結んだ独自の関係が、キリスト教と結びついたプラトニズムより古代的であると同時に、非常に現代的なものであることがわかってきた。エマスンが 20 世紀のモダニズム詩人、小説家の「先触れの走者」(エマスンにこの題の詩がある)であることが明らかになった。

詩の読み方についての考察は、武田雅子が以下の 3 編の論文にまとめた。「英詩入門—いろいろな詩の形・補遺—」では、形の上での分類として、Villanelle 及び Iambic monometer の詩の 2 項目、内容上の分類として、アルファベット順に、Ballad、Elegy、Mock heroic、Nonsense、verse、Ode、Pastoral、Requiem、Riddle poem の 8 項目を扱った。「英詩入門—いろいろな詩の技法—」では音(頭韻、オノマトペ)、形(繰り返し)、比喩(直論、隠喩、擬人法)、単語の並び方(撞着語法)、内容(誇張法、控えめ表現、アイロニー)に分け、実例を挙げ、技法を通して、詩

を読む意味と楽しみも述べた。「翻訳を通して見るディキンソンの難しさ、面白さ—“Luxury”の詩をめぐる」では、ディキンソンの詩にみられる典型的な難しさと面白さを一つの詩に探った。文法構造がわかりにくい、それは意識的な韜晦で、欠乏の美学という複雑なテーマは単純ではありえないからであり、宗教詩とも恋愛詩とも読めるということからもテーマがより複雑になっていると論じた。

擬人法に関わっては、藤田佳子の論文“The Speaker in Emerson's Major Essays”は、エマソンのエッセイに見られる矛盾を、語りのモードに注目することで解明できることを示した。欧米の伝統的なエッセイとは異なり、ここでは作者と読者との間に強烈な個性を具えたペルソナの語りの七変化が存在するという議論は、エマソンの詩にも有効である。

小田敦子の論文「過剰な自然—エマソンのエッセイと詩」はエマソンの詩のわかりにくさをエッセイ『自然』に見られる過剰さから説明した。『自然』の中で言及される詩人が見る「風景」はエマソンの詩が主題とするもので、その特徴は「個と全体」との同一性、有機的な連関を背景にもつ「個」の過剰さにあると捉えた。『自然』で「神の霊の出現」と語られる風景は、詩「先触れの走者」では朝の光や風の動きという自然の美であり、それは霊的なものだが、人間の意識に内面化されたものとして描かれていることを論じた。

自然という主題はエマソンのキーワードだがその意味はわかりにくい。しかし、それがエマソンのエッセイと詩を結ぶ大きな要素であり、エマソンにとって詩が重要性をもつ理由でもありと考へ、小田は以下の2編の論文でも自然を中心に、詩とエッセイとの関連を明らかにした。

「“The Secularity of Nature”—エマソンのエッセイと詩—」では、『自然』とそれ以後の自然についてのエッセイとを比較し、前者ではエマソンのキリスト教的世界観から、「長い時間をかけてゆっくり変化していく自然」という地質学天文学など科学的な世界観へのエマソンの変化が暗示されるにとどまるが、『自然』と同時期に書かれた詩には、自然である人間を肯定的に捉える詩が書かれていることを、「クセノファネス」、「個と全体」、「森の音 I」などを例にあげて論じた。

「エマソンの『自然』における“Spirit”と“Genius”」では、上述のエッセイと詩との違いを踏まえつつ、“Spirit”の章でかなり明示されるエマソンの新しい考えがいかにエッセイに隠されているかを論じた。その際のエマソンの用語は OED が初出として採用しているものであること、詩では“Spirit”という言葉より、自然としての人

間の起源を連想させる“Genius”という言葉が好まれていることを指摘し、エマソンの自然重視への志向を論じた。

エマソンの詩が価値あるものであることを、他の同時代作家への影響から明らかにすることができた。前述の武田のディキンソン論のほかに、小田は『ブライズデール・ロマンス』における超絶主義芸術家の『陰鬱な』仮面』の中で、「エマソンの詩「吹雪」がホーソーンの *The Blithedale Romance* の吹雪の夜や暖炉の火の描写に見られることを指摘し、カヴァデール像にホーソンとエマソンの複雑な関係が反映されていることを論じた。この論文は、最初、Hawthorne Society Summer Meeting で口頭発表し、説得力のある論として高評を得た発表論文を基に加筆したものである。

藤田はエマソンに強く影響を受けたソローについて、「ソローとミューア—自然の感覚における継承と変容」において、20世紀後半に入って注目を集めるに至ったネイチャーライティングの源流をソローに認め、両者の中間に位置するミューアまでの自然感覚の継承と変容を考察し、原生自然にもつ神聖さの感覚は不変である一方、自然とそれを見る主体との位置関係が、認識論上、変容を来たしていると論じた。

エマソンにおける「自然」の意味が詩によって明らかになってきたことを受けて、最終年度の秋には成果発表として、エマソンの普及という目的の実現のためにも多くのアメリカ文学会会員に興味をもてるテーマとして、代表作『自然』を取り上げ、ワークショップ“Reading *Nature*, Teaching *Nature*”を開催した。小田が上述の成果を述べたほかに、藤田の大学の授業として『自然』を読む方法についての実践報告と武田のサラ・ワイダーのエマソンの授業に対するアメリカの学生の反応についての報告をし、最後にワイダーがエマソンが重視する「関係」という観念が、『自然』でどのように現れているかを論じた。エマソンが推奨する「自然との借り物でない独自の関係」が、「美」の章の1月の美しい夕暮れの描写に現れていること、しかし、それがエマソン自身によって裏切られていることも指摘し、人間を自然に優越させるユダヤ・キリスト教の伝統の強さにも触れたが、最終章の「最高の博物学者」の暗示にエマソンの独自性を見ると論じ、この共同研究の成果を総括した。発表後の質疑応答も活発に行われ、エマソンへの潜在的な関心、それに応える研究成果の公表の必要性を確認できた。

今後、エマソンによるユダヤ・キリスト教的自然観からの逸脱について、さらに精査していくことが必要だと考へている。また、エマソンの訳詩集については、エマソンが影響

を受けたゲーテの博物学以上に現代的な自然の見方をしていること、そして、エマスンが『自然』を書いた必然性がわかるような訳詩集の出版を急いでいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

(1) 小田敦子、「エマスンの『自然』における“Spirit”と“Genius”」、*Philologia*、査読無、第 44 巻、2013、49-61

(2) 小田敦子、「“The Secularity of Nature” —エマスンのエッセイと詩」、*Philologia*、査読無、第 43 巻、2012、35-48

(3) 小田敦子、「過剰な自然—エマスンのエッセイと詩」、*Philologia*、査読無、第 42 巻、2011、107-117

(4) 武田雅子、「英詩入門—いろいろな詩の技法—」、大阪樟蔭女子大学研究紀要、査読無、第 1 巻、2011、15-28

(5) 武田雅子、「英詩入門—いろいろな詩の形・補遺」、大阪樟蔭女子大学『英語と文化』、査読無、第 1 巻、2011、17-32

(6) 藤田佳子、“The Speaker in Emerson’s Major Essays: A Narratological Study”、*Albion*、査読無、第 50 巻、2010、1-21

[学会発表] (計 2 件)

(1) 小田敦子、武田雅子、藤田佳子、Sarah Wider、“Reading *Nature*, Teaching *Nature*” 日本アメリカ文学会全国大会ワークショップ、2012 年 10 月 14 日、名古屋大学

(2) 小田敦子、“The Dismal Mask of a Transcendentalist Artist in *The Blithedale Romance*”、Hawthorne Society Summer Meeting、2010 年 6 月 11 日、アメリカ合衆国コンコード、コロニアル・イン

[図書] (計 3 件)

(1) 藤田佳子 (共著)、金星堂、『ソローとアメリカ精神—米文学の源流をもとめて』(ソロー学会編)、2012、「ソローからミューアへ—自然の感覚における継承と変容」、203-218

(2) 小田敦子 (共著)、英宝社、『異相の時空間』(大井浩二監修相本資子他編)、2011、「『ブライズデール・ロマンス』における超絶主義芸術家の『陰鬱な』仮面」、73-89

(3) 武田雅子 (共著)、国文社、『エミリ・ディキンソンの詩の世界』、2011、「翻訳を通して見るディキンソンの難しさ、面白さ—“Luxury”の詩をめぐる」、38-53

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小田 敦子 (ODA ATSUKO)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号： 80194554

(3) 連携研究者

武田 雅子 (TAKEDA MASAKO)
大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授
研究者番号： 30024475

(4) 研究協力者

藤田 佳子 (FUJITA YOSHIKO)
元奈良女子大学教授

Sarah Ann Wider (SARAH ANN WIDER)
Colgate University 教授